

## 《2024年10月 公開サロン（通算336回）報告》

\*\*\*\*\*

# ソーシャルフットボールについて

## ー精神科デイケアでのリハビリとソーシャルフットボールー

\*\*\*\*\*

【日時】2024年10月4日（金）19:00～21:00 ※終了後はオンライン懇親会（～22:30すぎ）

【会場】オンライン（Zoom）

【テーマ】ソーシャルフットボールについてー精神科デイケアでのリハビリとソーシャルフットボール

【演者】野村忠明（埼玉ソーシャルフットボール協会）

【参加者（計9名）】◎はNPO会員、○は会員外のファミリー、無印はファミリー外

注）（ ）内は個人の属性（所属等）とNPOサロン2002における役職

泉達也（FREM.FC）、○磯和明（会社員／国立市総合型地域スポーツクラブ理事）、◎小池靖（長野県佐久市在住の会社員／監事）、佐藤京子（埼玉ソーシャルフットボール協会）、◎嶋崎雅規（国際武道大学）、◎中塚義実（筑波大学附属高校／理事長）、○野村忠明（埼玉ソーシャルフットボール協会）、野村昌明（介護職員・特別養護老人ホーム勤務）、○守屋さえ（スフィード世田谷となでしこジャパンのサポーター）

【報告書作成】野村忠明ほか

【概要（演者より）】

近年、精神障がいを抱えている人たちの数は増加傾向で、コロナ禍の影響もあって増えたのではと思います。世の中に精神障がいについての理解がまだまだな状況にあり、僕も選手として参加している「ソーシャルフットボールについて」や「精神病とは？」「精神科デイケアという施設で何をリハビリしているのか？」「精神科デイケアでのリハビリプログラムとしてのソーシャルフットボールはどのようなものなのか？」など、精神科デイケアでのリハビリの必要性和、その中でソーシャルフットボールがどのような役割を担っているのかお話しします。精神障がいについての理解と、ソーシャルフットボールの普及が願いです。

みなさん、よろしくお願いします。

### 【キーワード】

ソーシャルフットボール、埼玉ソーシャルフットボール協会、フットサル、FREM.FC、精神疾患、精神障がい、精神科デイケア、障がい者スポーツ、アダプテッド、インクルージョン、スポーツ組織、野村忠明

### 【目次】

- I. はじめに
- II. ソーシャルフットボールの動画鑑賞
- III. ソーシャルフットボールについて(演者より)
  - 1) ソーシャルフットボールとは？
  - 2) ソーシャルフットボールの歴史
  - 3) 精神障がいについて
  - 4) 精神科デイケアでのリハビリとは？
  - 5) リハビリとしてのソーシャルフットボール
  - 6) ソーシャルフットボールの選手にインタビュー
  - 7) 総括・ソーシャルフットボールの課題
- IV. 質疑応答

## I.はじめに（中塚義実）

皆さんこんばんは。NPO 法人サロン 2002 理事長の中塚と申します。

月例サロンは今日で通算 336 回です。1997 年度からほぼ毎月行ってきましたが、今日のテーマの「ソーシャルフットボール」を取り上げるのは初めてです。大変楽しみにしております。

この写真は、今回の案内に使わせてもらったもので、今日の演者の野村さんから提供していただきました。当初この会は、私の勤務校である筑波大附属高校の会議室とオンラインの併用としていましたが、対面参加が少なく、しかもどうしても来られなくなったという連絡もあり、全てオンラインとさせていただきます。

初参加の方もおられると思いますので NPO サロン 2000 について簡単にご紹介します。「スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”」を“志”に掲げる NPO です。1997 年度からこの名称で活動し、2014 年度に法人化しました。

具体的な事業としては、毎月やっている「月例サロン」ですね。その拡大版が「公開シンポジウム」で年 2 回開催し、toto の助成金をもらって『遊 ASOBI』と題する報告書を発行しています。高校生年代のフットサルの全国大会「U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップ」も、toto 助成を受けて長野県千曲市で毎年開催しています。年明けの 1 月に第 8 回大会があります。このほかオリンピック教育や部活動問題にも、関係団体と連携しながら取り組んでいます。

月例サロンや公開シンポジウムでは、ここ数年、スポーツやアート、さらにその原点といえる“遊び心を育む環境づくり”にフォーカスしながら、歴史ネタも追いながら取り組んでいます。

8 月 1 日には「U18 女子フットサルを語ろう！」というシンポジウムを神戸で開き、翌 9 月には「U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップの短編ドキュメンタリー映画を作ろう」ということで、我々の主催事業の 10 周年をにらんでのディスカッションをしました。

そして本日、「ソーシャルフットボールについてー精神科デイケアでのリハビリとソーシャルフットボール」を取り上げます。話題提供者は野村忠明さんです。よろしくお願いします。

<このあと「サロン 2002 行動規範」の読み上げと参加者自己紹介があり、本日の中身に入った>



## II. ソーシャルフットボールの動画鑑賞（野村忠明）

ではちょっと画面共有します。

### <Youtube 動画鑑賞>



先ほど動画を見ていただきました。一番最初に出てきた動画ですが、埼玉県のFREM.FCの泉選手の動画を見ていただいて、もう一つの動画は、今年の4月に開催された全国大会に向けたプロモーションビデオで、全国大会を優勝した千葉県Espacioというチームの武田選手と、長崎のチームの選手の動画を見ていただきました。

今日のスケジュールですが動画を見ていただいて、ソーシャルフットボールの歩みと埼玉ソーシャルフットボールの歴史、精神障がいについて、精神科デイケアとリハビリ、あとソーシャルフットボールについてのお話した後、動画で出演した泉選手と、佐藤建人選手と佐藤建人選手のお母さんのたけママさん、佐藤京子さんのインタビューを行って、今後の課題についてお話したいと思います。

自己紹介させていただきます。野村忠明と申します。会社員をしております。埼玉ソーシャルフットボール協会の運営委員をしております。高校卒業後、引きこもり、32歳のときに引きこもりをやめました。幻聴が聞こえたので精神科を受診して統合失調症と判明しました。

2006年11月から埼玉精神科デイケアにてリハビリを行って、2010年デイケアを終了して、2011年から障がい者雇用で就労を始めました。2015年から埼玉ソーシャルフットボール協会の運営委員を行っています。

それでは、本題に入ります。

### 自己紹介

- 名前：野村 忠明
- 職業：会社員・埼玉ソーシャルフットボール協会運営委員
- 高校卒業後、引きこもる
- 32歳の時に引きこもりをやめる
- 幻聴が聞こえたので、精神科を受診 統合失調症と判明
- 2006年11月から精神科デイケアにてリハビリを行う
- 2010年デイケアを終了 2011年から障がい者雇用で就労
- 2015年から、埼玉ソーシャルフットボール協会運営委員になる

### Ⅲ. ソーシャルフットボールについて (野村忠明)

#### 1) ソーシャルフットボールとは？

精神障がいを抱えている人たちが参加しているフットサルです。ゴレイロを含む5人プラス女性1人の6人で行うフットサルです。始まりは、精神障がいを抱えている人たちのリハビリや居場所として活動は始まりました。運営は精神保健福祉に携わる方たちが中心になって活動が開始されています。選手層の厚い地域は、都道府県内でリーグ戦などを行い、地区大会があります。ソーシャルフットボール全国大会は、2年おきに開催しています。ソーシャルフットボールの世界大会(Dream World Cup)も開催しています。世界大会のルールでは、一般フットサルと同じルールの5人制のフットサルで、世界を目指して大会が行われています。

#### ソーシャルフットボールとは？

- 精神障がいを抱えている人たちが参加するフットサル
- ゴレイロを含む5人+女性1人 6人で行うフットサル
- 精神障がいを抱えている人たちのリハビリや居場所として始まる
- 運営は、精神保健福祉に携わる人たちが中心になり活動
- 都道府県内でリーグ戦などを行い、地区大会もある
- ソーシャルフットボール全国大会は、2年おきに開催
- ソーシャルフットボール世界大会も開催されている

#### 2) ソーシャルフットボールの歴史

まず、ソーシャルフットボールの歴史と、埼玉ソーシャルフットボール協会の歴史をお話したいと思います。

2007年 大阪から、精神障がい者フットサルは始まりました。大阪は、毎年、スカンビオカップという大会を開催しています。

2008年3月 埼玉は、フットサル大会 IN 埼玉実行委員会が、発足しました。

2008年5月 浦和レッズ主催「第1回ハートフルサッカー大会」の運営協力を行い、埼玉の精神障がい者フットサルが始まりました。

2009年 フットサル大会 IN 埼玉実行委員会、通称「埼玉カンピオーネ」として活動が始まります。

2010年 埼玉選抜チーム「埼玉 CAMPIONE」結成

埼玉県精神障がい者フットサルリーグ(Sリーグ)初開催。Sリーグは毎年開催

2011年 ソーシャルフットボール関東プレ大会 関東大会は以後、毎年開催

2013年 第1回ソーシャルフットボール全国大会開催 埼玉 CAMPIONE は3位

2015年 埼玉カンピオーネの運営に、選手も参加するようになる

2018年 10年を迎えて「埼玉ソーシャルフットボール協会(SSFA)」に団体名を変更する  
現在に至ります。

#### ソーシャルフットボールの歴史①

- 2007年 大阪から精神障がい者フットサルが始まる
- 2008年3月 埼玉で、フットサル大会IN埼玉実行委員発足
- 2008年5月 浦和レッズ主催「第1回ハートフルサッカー大会」運営協力 埼玉のフットサルの活動始まる
- 2009年 フットサル大会IN埼玉実行委員会  
通称「埼玉カンピオーネ」として活動が始まる
- 2010年 埼玉選抜チーム「埼玉CAMPIONE」結成  
埼玉県精神障がい者フットサルリーグ「Sリーグ」開催

#### ソーシャルフットボールの歴史②

- 2011年 ソーシャルフットボール関東プレ大会開催
- 2013年 第1回ソーシャルフットボール全国大会開催
- 2015年 埼玉カンピオーネの運営に、選手も参加
- 2018年 10年を迎える  
「埼玉ソーシャルフットボール協会」に団体名変更  
SSFA  
Saitama Social Football Association  
現在に至る



具体的にお話すると、精神障がいのある方には、認知のゆがみというものがあります。認知のゆがみの代表的な10項目の中から「結論への飛躍」と「白黒思考」について、説明したいと思います。

人は様々なストレスを受けますが、例えばネガティブなストレスを受けるとします。ストレスの堤防として考えると、ネガティブなストレスを受けて、ストレスの堤防を超えることで、僕の場合には、「ダメだ!」と考えるようになりますが、その思考の飛躍を「結論への飛躍」と言います。

わかりやすく説明すると、テストを受けて、自分なりに勉強したのだけど、あの問題わからなかったな、あそこはもう少し勉強しておけばよかったなど、自分なりに試行錯誤したのですが、テストで赤点をとってしまい、「赤点だあ。」と思った後、ストレスがストレスの堤防を越えたことで、極端に「自分はもうダメだ!」と、思考が飛躍することを「結論への飛躍」と言います。

一つの例として、僕の弟は引きこもっていた時期があったのですが、引きこもりをやめて就職活動を行ったのですが、自分なりに試行錯誤して就職面接を行いました。ですが、なかなか就職先が見つからなくて、就職活動の初めのころは、採用に落ちて「採用ダメだった!」でも次はがんばろう!」と思えていたのですが、採用に受けても受けても落ちるので、「今回もダメだった! 自分はダメかもしれない」と気落ちしてしまいました。この就職活動を行った後の思考「自分はダメかもしれない」という思考が、「結論への飛躍」です。

強くネガティブなストレスがかかることで、はじめは「ダメだ。でも、がんばろう!」と考えられていたものが、ストレスがかかり続けることで、自分自身の考え方が変わっていき、「自分の人生はダメだ」という結論への飛躍の思考になってしまい、さらに「死にたい」と考えるような結論への飛躍の思考が生まれてしまいます。

### 「認知のゆがみ」とは?

- 「自分はダメだ」とか「自分にはできない」であるとか、極端に考えてしまう思考の癖

認知のゆがみの代表的な10項目の中から、「結論への飛躍」と「白黒思考」について説明します。



### 「結論への飛躍」とは?

- テストを受けて赤点をとってしまった。
- 「赤点だあ」(「赤点だあ」は事実)といった後、
- 「自分はもうダメだあ…」と、どうにもならないと考えてしまい思考が飛んでしまうこと。



### 「結論への飛躍」

- 就職活動をしていて、なかなか就職できなかった。
- 初めの時は、「採用ダメだった。(「採用ダメだった」は事実)でも、次はがんばろう!」と考えられていた。
- なかなか就職先が見つからなくて考え方が変わり、
- 「今回もダメだった! (「今回もダメだった!」は事実)自分はダメかもしれない…」
- 「自分はダメかもしれない…」は、「結論への飛躍」



### 強くネガティブな思考がかかり続けると

- はじめは「ダメだ。でもがんばろう!」と考えられていたのが、ストレスがかかり続けることで「自分の人生はダメだ…」と考えるようになっていくことを「結論への飛躍」と言います。
- さらにストレスがかかり続けると「死にたい」と考えるような「結論への飛躍」が生まれてきてしまいます。
- 脳神経のつながりで、一度できた神経回路は無くならないので、ストレスの堤防をストレスが越えることで、すぐに「結論への飛躍」の「自分はダメだ…」や「死にたい」という思考が出てくるようになってしまいます。

脳神経のつながりで、一度できた神経回路は無くならないもので、ストレスがかかることで、ストレスの堤防をストレスが越えることで、すぐに結論への飛躍の「自分はダメだ」や「死にたい」という思考が現れるようになってしまうようになります。

そう状態の人も、ストレスの堤防をストレスが越えることで、妄想に思考が飛んでしまう結論への飛躍という思考が起こっていることになります。

精神障がいを抱えている人たちは、その思考が「自分はもうダメだ」とか「もうダメだ。死にたい」と極端な思考に飛躍してしまう感じの状態です。このような極端な思考を「白黒思考」「べき思考」と呼びます。

二項対立的な思考で、「できる」「できない」や「いい」「ダメだ」、「善」「悪」、「聖」「邪」、「好き」「嫌い」のように極端に考えてしまう思考を「白黒思考」と呼びます。自分の思考として、ポジティブ思考とネガティブ思考がはっきりわかれてしまう考え方なので、あまりよい考え方ではありません。

文化人類学者のレヴィストロースは、「料理の三角形」という本を出版されているのですが、二項対立ではなく、三項対立で考えられると、いろいろ分析することができて考えることができて、いいとお話されています。

料理の三角形は、「生のもの」、「焼いたもの」、「腐ったもの」と、三項対立を作ります。三項対立によって、お料理の分類分けや分析を行うことができるようになります。

三項対立としては、「聖」「邪」「俗」または、「いい」「ダメだ」「わからない」という分け方をすることで、分類分けや分析をすることができるようになります。

二項対立で考えるのではなく、多項対立的に物事を考えて、分析や分類分けなどをしながら、多角的に物事を考え、自分の考えを決められるようになることが重要です。

テストを受けて、赤点をとってしまって、「ダメだ！ 自分の人生は終わった」と極端に考えるのではなく、回答問題はできたとか、漢字は書けなかったや、意味を説明するのがうまくできなかった

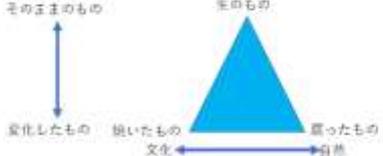
### 「白黒思考」とは？

- 「自分はもうダメだ…」や「もうダメだ。死にたい。」などの思考は、「白黒思考」または「べき思考」と呼びます。
- 白黒思考とは、「できる」「できない」
- 「いい」「ダメだ！」や「○」「×」
- 「善」「悪」や「聖」「邪」、「好き」「嫌い」などの二項対立的な思考法



### 「料理の三角形」

- 文化人類学者レヴィストロースの考え「料理の三角形」
- 三項対立的に、物事を考えると「分類分け」や「分析」ができるようになるので、そのように考えたほうがいいという教え。



### 「三項対立」的に物事を考える

- 三項対立、多項対立的に考え、思考を分類分けして分析を行う。
- 「少しいい」「わからない」などの理由について考えてみるのが重要



などの結果で、「テストダメだった。次はがんばろう」と考えられるようになると、多角的な視点に立つことができ、極端な思考になりません。

いろいろ経験した感想として、極端に「よかった！ 次もするべき」や「悪かった。この先もだめだろう」と考えるのではなく、いくつかの視点を持って、いろいろ分析できるように生きられるようになることが、大人になることなのかなあと、僕は感じています。

### 多角的に多項的に考える

- ・テストを受けて赤点をとってしまった！
- ・「ダメだ！ 自分の人生は終わった…」と考えるのではなく、
- ・「回答問題はできた！」「漢字は書けなかった…」「意味を説明するのがうまくできなかった」など、多角的な視点に立って考え、「テストはダメだった。つぎはがんばろう」と考えられるようになることが望ましい。



#### 4) 精神科デイケアでのリハビリとは？

では、リハビリとはどのようなものなのでしょうか？ 精神障がい、リハビリを行うことで、ストレス対処できるようになるのですが、そのようなことを学ぶ場が、精神科デイケアになります。さまざまにある精神疾患から、自分の力で立ち直ることができるように、自分の症状の管理、社会技能・生活技能を身につけ、ストレス対処法を学び、ストレス対処できるようにする場が、精神科デイケアです。

具体的にお話すると、精神科デイケアでいろいろな活動を行いながら、自分の症状がどのようなものであるのか理解して（病識を作る）、症状の管理ができるようにすることと、症状の管理ができるようになったら自分の抱えている症状に対処できるようにストレス対処法を身につける場です。みんなで活動を行うので社会の枠から出ないような社会活動を行うことができるようにすることです。もう一つ、一人暮らしなどができるように生活技能を身につける場として、精神科デイケアでリハビリを行います。

それと、対人関係がストレスになるので、多くの人のいる中で、生活技能を身につけることが、重要になってきます。そのため、精神科デイケアでは、「SST(ソーシャル・スキル・トレーニング)」という会話の仕方を学ぶプログラムも存在しています。

生活技能を上げることで、ストレスの堤防を上げたり、厚くしたりするのが、精神科デイケアでのリハビリの目的です。精神科デイケアスタッフのお話によると「生きる力をみにつけさせる」ことを

### 精神科デイケアでのリハビリについて①

- ・精神障がい、リハビリを行うことで対処できるようになる
- ・さまざまにある精神疾患から、自分の力で立ち直ることができるように、「自分の症状の管理」「社会技能・生活技能を身につける」「ストレス対処法を学ぶ」「ストレス対処できるようにする」技能を身につける場が、「精神科デイケア」
- ・自分の症状がどのようなものであるか理解する(病識を作る)
- ・症状を管理できるようにする
- ・ストレス対処法を学び、ストレス対処できるようにする
- ・集団で活動を行い社会の枠から出ないような社会技能を身につける
- ・一人暮らしできるように、生活技能を身につける

### 精神科デイケアでのリハビリについて②

- ・対人関係がストレスになるので、多くの人のいる中で生活技能を身につけることが大切。
- ・そのため精神科デイケアでは「SST(ソーシャル・スキル・トレーニング)」という会話を学ぶプログラムがある。
- ・生活技能を上げることで、ストレスの堤防を上げたり、厚くしたりするのが、精神科デイケアでのリハビリの目的。



リハビリと呼ぶそうです。そのため精神科デイケアは、社会であり、集団であり、コミュニケーションを大切にすることもあります。

僕の精神科デイケアでのリハビリは、抑うつ的でネガティブな精神状態でしたが、精神科デイケアに通うことで、いろいろ楽しいことに気づき、発見することで自分らしさを取り戻すことができました。

### 5) リハビリとしてのソーシャルフットボール

先ほどお話しましたが、対人関係がストレスになる状況なので、人がたくさん集まる集団行動、スポーツとして「ソーシャルフットボール」が存在しています。ソーシャルフットボールを通じて、人間関係を学んで体験し、社会参加をしています。デイケアスタッフのお話によると、グループワークが重要で、フットサルは、みんなでいろいろ話し合いチームを運営しています。大会に参加

した時は、優勝を目指してミーティングを行い試合にのぞみ、みんな障がいを抱えている人たちなので、あまり負担をかけないように分担をしてチーム運営を行って、チームとしては人を育てないといけないところもあるので、役割なども決めて運営しています。そのようなリハビリの場でソーシャルフットボールは、ツールとして存在していて、ソーシャルフットボールを通して、次のステップが見えるといいな、という存在です。

#### リハビリとしてのソーシャルフットボール

- 対人関係がストレスになる状況なので、人がたくさん集まる集団行動、スポーツとして「ソーシャルフットボール」がある。
- ソーシャルフットボールを通じて、人間関係を学んで体験し、ソーシャルフットボールの世界に社会参加しています。
- デイケアスタッフさんのお話によると、「グループワーク」が重要であるとお話されています。
- リハビリの場でのソーシャルフットボールは、「ソーシャルフットボールの活動を通して、次のステップが見えるといいな」という存在。

### <自分の体験>

僕の体験をお話させていただくと、2009年に精神科デイケアで、「フットサル」のプログラムが始まり、デイケアのお友達から誘われてフットサルを始めました。僕はサッカーの経験はなく、ボールを蹴ることやボールを止めることから始めましたが、初めのころは、なかなかうまくできなくて、練習に参加するのにもたいへんでしたが、参加するにつれて、ボールを止められるようになり、蹴ることができるようになって、フットサルをプレーすることが楽しく感じるようになっていきました。精神科デイケアは、みんな、リハビリをするために通っていて、みんな初めは、たいへんな思いをして通っていますが、通っている間に仲間やお友達ができるので、少しずつ楽しくなってくる場でもあります。ですが長く通っていると、かかるストレスやプレッシャーも高くなってきて、なかなか長く通うのもたいへんな場でもあります。

#### ソーシャルフットボールの体験

- 僕は、2009年に精神科デイケアにて、ソーシャルフットボールに出会う。サッカーの経験がなかったので、ボールを止めたり、蹴る練習から始める。
- 参加していて、ボールを止めたり、蹴ることができるようになって、楽しくなってきました。
- リハビリしているみんなも、初めのころはたいへんな思いをして精神科デイケアに通所していますが、少しずつ楽しくなってくる場です。



僕は精神科デイケアでリハビリを行ったおかげで、「不安なこともあるけれども、勇気をもっていろいろなことにチャレンジできるように変わりました。」が、このように考えられるようになったことが、リカバリーしたといえます。

フットサルの魅力は、仲間とボールを蹴ることが楽しいですし、得点が入ったときは、最高にうれしいところが魅力です。合わせて、フットサルコートが、たくさんあるので社会資源として、フットサルに触れる機会を作ろうと思うと、個サルに参加したり、フットサルスクールに参加したりすることができるので、比較的簡単にフットサルで社会参加することができることも、大きな魅力です。それと僕みたいに長くソーシャルフットボールに参加していると、仲間やお友達ができるので、大会に参加することで、再会するうれしさや楽しさがあるところも素晴らしいところです。

僕の話は以上になります。

## 6) ソーシャルフットボールの選手にインタビュー

ソーシャルフットボールの選手にインタビューして、いろいろお話を聞きました。

精神病になったときは、何が起ったかわからない感じで入院して、たいへんだったとお話される方が多いように感じました。ソーシャルフットボールとの出会いについては、精神科デイケアで知り始めたという方や、自分で調べて入ってくる方もいます。いろいろな理由で始める方がい

ます。ソーシャルフットボールを始めてよかったことをお伺いすると、すごく楽しいからとお話される方や、仲間と話し合いながらチームを運営したり、練習して大会を目指したりするのが素晴らしく、仲間と楽しくできるのがいい、という意見が多いように思いました。他にも、なかなか居場所が見つけれなかったのが、ソーシャルフットボールという居場所を見つけることができ、よかったとお話される方もいました。

### リハビリを体験して

- 精神科デイケアでリハビリしたおかげで、「不安なこともあるけれども、勇気をもっていろいろなことにチャレンジできるように変わりました。」と考えられるようになりました。
- そして、そのような状態をリカバリーしたと言います。



### ソーシャルフットボールの魅力について

- 仲間とボールを蹴るのが楽しい!
- 得点が入ったときは最高にうれしい!
- フットサルコートがたくさんあり、社会資源が豊富
- フットサルスクールに通うことなどで、社会参加ができる
- 長くソーシャルフットボールに関わっていると、仲間や友達がたくさんできるので、再会することでうれしさや楽しさがある
- 「ソーシャルフットボールという居場所を見つけることができた」とお話される方も多くいらっしゃいます

### ソーシャルフットボールの選手にインタビューして

- 精神病になったときは、何が起ったかわからない状態で入院していて、たいへんだった
- ソーシャルフットボールとの出会いは、精神科デイケアで知り始めた方や、自分で調べて入ってくる方がいます
- ソーシャルフットボールを始めてよかったことを質問すると、
- 仲間と話し合いながらチームを運営したり、練習して大会を目指したりするのが素晴らしく、仲間と楽しくできるのがいいとお話でした
- 「居場所ができてよかった!」とお話される方も多いです

野村 忠明：それでは、ソーシャルフットボールの選手を呼んでいるのでインタビューしたいと思いません。泉達也選手です。FREM. FCというチームに所属していて、元キャプテンです。泉選手、インタビューをお願いします。まず精神病になったときのお話をお願いします。

泉 達也：そうですね。僕が、病気になったのが2008年なんです。さっきも野村さんが入院の時の話をいろんな人に聞いていて、わけがわからなかったという話だったんですけど、僕もそんな感じで、気づいたときには病院のベッドで拘束された状態でいたんです。記憶が曖昧なところがすごくあって、記憶が飛び飛びになっていて、気づいたときは拘束された状態だったんですね。そんな感じのところですよ。

野村：ありがとうございます。ソーシャルフットボールとの出会いはどういう感じだったのでしょうか？

泉：ソーシャルフットボールは、回復して病院を退院してから1～2年は家で引きこもってたんですけど、それからちょっと社会復帰を目指そうというところで、精神科の主治医の方からデイケアに参加してくれということになりました。そこに参加していたとき、デイケアのメンバーにFREM. FCの選手がいて、その方に、精神障害者のチームがあるんだけど一緒にフットサルやらないかって誘われてやり始めました。

野村：デイケアで出会ったんですね。デイケアの友達と。ではソーシャルフットボールと出会ってどのように変わりましたか？

泉：元々人と話すのは苦手な方だったんですけど、いろんな方とコミュニケーションをとる必要があって、ソーシャルフットボールの場で結構人と話すことができるようになったかなというのはありますね。

野村：ではソーシャルフットボールとはどのようなものでしょうか？

泉：自分の動画でも言っていましたが、「仲間がいる場所」というところだと思っています。

野村：泉選手は「結構みんな苦勞されてる方が多いから」と以前にも話して下さったことがありますが、何か伝えたいこととかありましたら一言お願いします。

泉：そうですね。精神障がいといういろんな見られ方をすると思うんです。また、病気が原因でいろんなことをすることもあるかもしれませんが、あまり人に迷惑をかけないようなことであれば、温かく見守ってほしいなと思います。以上です。

## ソーシャルフットボールの選手に聞く

- 泉 達也選手
- チーム名：フレムFC
- 元キャプテン
  
- 質問
- 精神病になったときは？
- ソーシャルフットボールとの出会い
- ソーシャルフットボールと出会って、どのように変わったか？
- ソーシャルフットボールとは？

野村：お話ありがとうございました。続いて佐藤建人選手にお話してもらって大丈夫でしょうか？

佐藤京子：すみません。建人はちょっと今日体調が悪いので、代わりに母親なんですけど、よろしいでしょうか？

野村：はい、大丈夫です。病気になったときのことなども伺いして大丈夫ですか？

佐藤：大丈夫です。うちの息子、精神障がいの手帳は持ってるんですけども、野村さんや泉さんとはちょっと違って、精神疾患と言っても「てんかん」なんです。「てんかん」は脳の病気なので、精神疾患のくくりには入るんですけども、病気の形態としてはどちらかというと身体障がいに近い症状があります。病気になったのが大学4年生のときで、突然大発作を起こしまして、そこから救急搬送されました。脳炎ってお聞きになったことがあるかと思いますが、脳炎を発症して、その後遺症で難治性のてんかんになりました。

「てんかん」って皆さん聞いたことあると思うんですが、私も言葉では知ってたんですけども、実際の発作はそれまで1回も見たことがありませんでした。イメージとしては泡を吹いていきなり倒れる、そんなイメージかと皆さん思うでしょう。確かにそういう発作もあるんですけど、決していきなり倒れたりするような発作ばかりではなくて、本当にいろんなタイプの、ただぼうっとするだけだったりとか、片手がピクって上がったりとか、いろんな種類の発作があるんですね。

その発作が日常的にあって、大学4年生で卒業してからはサッカーのジュニアユースのコーチの道に進むことが決まっていたんですけども、病気になったためにコーチの仕事はできなくなりましたし、運転もできません。卒業はしたもののやることのないような状態が続いていたときに、何とか息子がサッカーができないか、やらせてあげることできないかと検索していたら、埼玉ソーシャルフットボール協会のホームページに行き当たりました。そこからの出会いになります。

野村：ソーシャルフットボールと出会ってどのように変わられましたか？

佐藤：「てんかん」の一般的なイメージとしては、先ほども申し上げたとおり、泡を吹いて倒れるっていうもので、未だに偏見のある病気なんです。今も仕事には就いてはいますけれども、なかなか同じ職場の方にも理解していただくことができなかったり、あとは、例えば人混みで発作になったときにはものすごい人だかりになってしまうような、そんな「物珍しい」と言ったらちょっと語弊はあるんですけども、未だに理解を得られていない病気だと思います。

ソーシャルフットボールと出会って一緒にフットサルする仲間が増えて、やっぱり最初は皆さん、てんかん発作を見たときにびっくりされていました。けど、もうソーシャルフットボールに携わるようになって10年近くになるんですけど、今は息子が発作を起こしたときに、皆さん、見守ってくださる方や、服を緩めなきゃいけないので靴を脱がしてくれたり、あと暑さに弱いのであおいでくれたり氷水で冷やしてくれたり、本当に皆さん1人1人、何も言わなくてもそういう対応をして温かく見守ってくださいます。誰も「てんかん」の発作に対して忌み嫌うことなく受け入れてくださいます。私達親子にとってはとても居心地のいい場所ですし、また「てんかん」という病気を抱えながらフットサルするという、息子にとっては本当に生きがいの場所になってます。

野村：ありがとうございます。佐藤健人選手の日常について伺っても大丈夫ですか。出勤などは？

佐藤：障がい者雇用ですけど、週に3日、1日4時間、いま12時間のお仕事をさせていただいてもすぐ1年になります。

野村：ありがとうございます。たけママ（佐藤京子）さんは、埼玉ソーシャルフットボール協会の運営委員やチームのサポートにも参加してくださっていますが、参加して感じていたり思うことを教えていただけないでしょうか。

佐藤：はい。最初私は運営委員ではなく、ただの付き添いの母親だったんですけれども、付き添っているうちに、毎回その場に来ているんだったら何かお手伝いできることはないかなということで運営スタッフに入らせていただきました。2019年に全国大会があり、埼玉ソーシャルフットボール協会として大阪の全国大会まで帯同したんですけれども、そのときにもものすごく感じたのは、皆さんフットサルをバリバリにやられる方ばかりなんですけど、やっぱり病気を抱えてる方なんだなということを強く感じました。ですので、何かしらのサポート、例えば心のケアだったり体のケアであったり、支える必要性をすごく感じました。

野村：ではソーシャルフットボールとはどのようなものだと思いますでしょうか？

佐藤：私の中では成長を支える気持ちもちろんありますけど、そこに参加することで、私も選手の皆さんから元気もらい、フットサルと全然関係ないような、例えば恋バナだったり家庭の悩みだったり、相談を受けることがあるんですね。相談を受けてお話することで、私自身が癒されている、お話をしながら、私のつらい気持ちも皆さんに訴えて聞いていただいたりする。相互理解ではないんですけれども、そこで私自身が救われる、ソーシャルフットボールが救われる場になってます。

野村：ありがとうございます。たけママ（佐藤京子）さんから伝えたいことがあればお願いします。

佐藤：はい。「てんかん」という病気を見たことのない方は、もし街中で発作を見たらものすごくびっくりするとは思いますが、どうか偏見を持たないでいただきたいと願います。風邪をひいたらくしゃみが出たり咳をしたりします。それと同じで、「てんかん」としていろんな発作があるんです。いろんな発作があるんですけど、それは「てんかん」という病気では当たり前のことなので、風邪をひいて咳が出る、鼻水が出る、くしゃみが出るのと同じような感覚で、偏見を持たずに「てんかん」という病気なんだなと、さらっと見守っていただけるような社会になればいいなと思います。

野村：たけママ（佐藤京子）さんありがとうございました。インタビューに参加してくださった2名の方たちは、埼玉のソーシャルフットボールにたいへん貢献されている方たちで、皆さんにご紹介したくインタビューをお願いしました。お話ありがとうございました。

## 7) 総括・ソーシャルフットボールの課題

### ◆総括

僕は、「ソーシャルフットボールは、リハビリとして必要だから」運営に参加しています。

運営を行っているときみんなから感謝されるので、そこがやりがいを感じる場所です。運営に参加している原動力は、フットサルは楽しいというのが大きいと思います。

### ◆ソーシャルフットボールの課題

ソーシャルフットボールの課題は、精神科デイケアの人たちは普段運動をしていないため、けがが多いので、精神科デイケアから新しくソーシャルフットボールに参加してくるところがないことと、新しい人がなかなか入ってこないことで、選手の高齢化の問題があります。

女性のソーシャルフットボールの活動は、なかなか進んでいなくて、ソーシャルフットボールの女性選手たちが、ソーシャルフットボール女子日本代表を作りたいと、いろいろ活動を行っている状況があります。

ソーシャルフットボールは、ソーシャルフットボールが最終ゴールではなく、通過点でもあると感じます。ソーシャルフットボールに居場所を求めて活動している人もいますが、もっと高いレベルを目指すのであれば、フットサルの県リーグや関東リーグなどがあり、一般の選手と一緒に練習してプレーする道もあります。一方で、精神科デイケアのリハビリプログラムとして参加していて、デイケアを修了して就労したので、ソーシャルフットボールを卒業する人たちも多いです。精神科デイケアを利用している人たちは、社会復帰や社会参加が目的でリハビリを行っているので、就労しながら、ソーシャルフットボールを通じて社会活動を行いたいと思う人は、あまり多くない状況だと感じます。ソーシャルフットボールに長く参加している人たちは、フットサルが大好きなので続けている人たちばかりです。それと、精神障がい者フットサル「ソーシャルフットボール」を知らない人も世の中にはたくさんいるので、精神障がいについてや、ソーシャルフットボールについて、理解してもらえないことも原因だと考えられます。

僕が一番問題を感じる場所は、地域とのつながりがない形でソーシャルフットボールのチーム運営を行っている、地域と一緒に活動しているチームは、埼玉県では「ソシオ所沢」というチームくらいです。地域と一緒に活動するチームが現れるようになると、ソーシャルフットボールの環境も変わるのではないかと感じています。具体的にお話すると、地域の障がいのない人たちと一緒にフットサルの練習を行うことや、子供たちと一緒に練習することや、精神障がいについての講演を行いながら、ソーシャルフットボールの普及活動を行う活動が、必要だと感じています。

もう一つ、現在、埼玉ソーシャルフットボール協会の運営委員で、精神病の当事者で参加しているのは僕一人で、もう少し選手が運営に興味を持ってきて参加してくれるようになると、だいぶソーシャルフットボールの状況も変わるのではないかと感じています。

僕のお話は以上になります。皆さんありがとうございました。

### ソーシャルフットボールの課題①

- 精神科デイケアなど、普段運動していない人が参加するので、けがが多く、新規参入がなかなかないこと
- 選手がなかなか入ってこないことで、選手の高齢化の問題
- 女子フットサルの活動がなかなか進んでいない状況。ソーシャルフットボールの女性選手が、ソーシャルフットボール女子日本代表を作りたいと活動中！
- ソーシャルフットボールは、最終ゴールではなく、通過点であること。一方で居場所という必要性やリハビリの場という現実
- 「ソーシャルフットボール」の社会認知度が低い問題

### ソーシャルフットボールの課題②

- ソーシャルフットボールのチームが、地域とのつながりがないことの問題
- 地域とともに活動するようになると、変わるのではないかと？
- 精神病や精神障がい、ソーシャルフットボールについて、社会のみなさんが知らない状況があるので、普及活動が重要！
- ソーシャルフットボールについてお話する機会をいただくと変わるのではないかと？
- ソーシャルフットボールの選手で、運営に参加する人を増やして、みんなでつくるソーシャルフットボールにしたい！

## IV. 質疑応答

中塚：ありがとうございました。ここからは自由に質疑応答、意見交換をしていきたいと思います。

野村さんがソーシャルフットボール関わっておられることは断片的には聞いていましたが、去年の忘年会でいろんな話をする中で、「ぜひまとめて話してよ！」とお願いしたのがようやく実現しました。スポーツの話として聞くのも面白く、いろいろ共通するところを感じます。また障がいを持つ方々がどのように社会復帰していくのか、そのための一つのツールとしてのスポーツという話も貴重だし、ソーシャルフットボールが対象としている障がいを持つ方や家族の方の生の声は非常に勉強になります。今日お聞きできてほんとうによかったなというのが率直な感想です。

私からお聞きしたいことはいろいろあります。まず整理しておきたいんですけど、知的障がいとはまた別ですよ。

野村：精神障がいと知的障がいは別ですね。

中塚：そうですね。例えばオリンピックがあつてパラリンピックがある。パラリンピックには聴覚障がいは含まれず、デフリンピックがある。来年東京で開かれます。さらに知的障がいの人たちの競技会としてスペシャルオリンピックスがあります。スペシャルオリンピックスを目指すサッカーチームの物語が映画になったように、こちらは割と紹介されています。以前、東京教員のチームメイトに王子特別支援学校の教師がいて、彼が指導する知的障害の子たちと筑波大附属高校サッカー部と一緒に練習したことがあります。そういう子たちとは、また別だということですね。

野村：僕は詳しくはわかんないんですけど、知的障害の方のサッカーは、お子さんを抱えてるお父さん、お母さんが、運営に携わる感じでやっているんじゃないかなと思っています。サッカー協会の審判の方とかにいろいろ協力を受けている状況だと思いますけど、精神障がいの方のフットサルは、先ほどもお話しした通り、精神保健福祉医療に携わっている医療関係者の方たちが始めたものです。精神障がいを抱えているということで守らなければいけない部分があるのと同時に、ある程度デイケアなどでリハビリが終わった後に、社会参加、社会に出ていくということが必要なので、その辺のところ、外に出ていく感じなかなか作れていないのが現状ではないかと思います。

あまりコミュニケーションが得意じゃない人たちも多いので、外との繋がりが持ちにくい。泉選手やたけママさんは外との繋がりも持ってらっしゃる方ですけど、精神障がいを抱えて外の繋がりを持っている人って少ないと思います。ソーシャルフットボールやってる人たちは、ちょっとずつ繋がっていく感じになってるんじゃないかなと思います。

中塚：先ほど言った映画は「プライド in ブルー」ですね。知的障害者の日本代表チームの話でした。スペシャルオリンピックスへ向けて、いろんな地方で苦労しながらサッカーに取り組む人たちを取り上げた映画だったと思います。そっちは多分、福祉から離れてスポーツの方に来てるのでしょね。

最初に野村さんからお聞きしたときは、そちらの話なのかなと思ってたんです。けどいろいろ聞いてみると、そっちではなく、いわゆる精神障がいの方なのだということがわかり、なるほどそういう人たちがこのような活動をされてるんだということを改めて知ることができました。

守屋さんがチャットに何か書かれているようですが…

守屋：優勝、金メダルです。（佐賀で開催されたウォーキングフットボール大会の金メダル）

注) ソーシャルフットボール全国大会も佐賀県で開催されていました。

中塚：すごいですね。

守屋：野村さん見えてるー？

野村：見えてます。はい。

守屋：これです。

中塚：同じ会場でウォーキングフットボールもやってたわけですね。

守屋：多分会場は別だったと思います。1日出ていましたので。別のところでも障がい者の大会やるといってお話は聞いていたんですけど、なんせ1日中試合だったので、そちらを見学に行くことができませんでした。この青いのは佐賀の名物のびいどろ。ガラス細工だそうで、とっても自慢だそうです。今度生でお見せしないと…。

中塚：そうですね。では、守屋さんからどうぞ。

守屋：冒頭でも申し上げたんですけど、ウォーキングフットボールの関係で、残念ながらソーシャルフットボールの方とはやったことないんですけども、知的障がいの方、聴覚障がいの方、視覚障がいの方とはやったことがあるんですね。特にブラインドの方は、応援しているスフィーダ世田谷がブラインドのチームを持っているので、その人たちと一緒に2ヶ月に1回遊んでます。先週の日曜日、本庄で大会があったので行ってきました。スフィーダはとても弱いんですけど、皆頑張ってます。

そのときにブラインドのフットサルを始めた子たちがすごく喜んだのは、小さいときから目が不自由だった子は、親から、危ないからあれやっちゃ駄目、これやっちゃ駄目ってずっと言われ続けてきた。それが、フットサルをやるということは、ある意味で怪我するのは当たり前ですよ。「それを公式にやってもいいっていわれるのがすごく嬉しい」と話していて、ちょっとびっくりしました。精神的な問題の場合はそういうことってあるのでしょうか。

野村：埼玉ソーシャルフットボールでも、理解のある人たち、どこかのサッカーチームが精神障がいフットサルのチームを作ってくれるといいんですけどね。そうすると状況が変わるんじゃないかって思います。そういうふうにチームがあるといいですよ。みんなできできますよね。

子供たちと一緒にフットサルやったりするのもいいんじゃないかとお話しましたが、精神障がいを抱えてる人って、子供嫌いというか、子供が苦手な人も結構いるので、なかなか難しいところがありますね。

中塚：そのあたりのことについて磯さんがチャット欄に書き込んでくれました。「ソーシャルフットボールについて」というサイトですね。私の方で共有しましょうか。



中塚：「ソーシャルフットボールについて」「7つの障がい者サッカーについて」という項目があるけど、日本障がい者サッカー連盟（JIFF）のオフィシャルサイトですね。その中のNPO法人日本ソーシャルフットボール協会のところには、「他の障がいと比べ、精神障がい者のスポーツ参加率は極めて低く、その内容もレクリエーションの範囲にとどまっていた。病気になったことから自分に自信が持てない、自分には価値がないと思ってしまう人も多くいます。そこでフットボールを通じて自信を持ち、仲間を持った人がモデルケースとなり、「自分にもできるかも」と思ってもらえるような好循環が拡げていきたい。そんな想いを持って、協会を設立しました。」とあります。他の団体には、ろう者とか、ブラインドサッカーとか、電動車椅子とか、いろいろあり、私が先ほど言った知的障がいについても「NPO法人日本知的障害者サッカー連盟」が紹介されています。「全国に特別支援学校・学級網が発達していること、サッカーの面では国体の後に開催される全国障害者スポーツ大会の競技種目となっていることから、全国に広く発達している競技です」と書かれています。

野村：精神障がいの方はいま普及活動をやっている感じです。群馬県には、精神障がいのフットサルチームは1チームしかなくて、埼玉は結構あるんですけど、普及活動している感じです。

中塚：磯さんから何かコメントありますか。このページを紹介してくれましたけど。

磯：私もほんの少し接点があるので、いろいろお伺いしたいと思います。少し考えてたんですが、一つはフットサルというところなんです。私も地域で15年ほど、自分でチームを作ってフットサルをやっています。みんな同じだと思うんですけど、体を動かすと元気になる。やはりスポーツをやって、みんなが楽しんで元気になるという意味で、地域のよりどころになっているかなと思います。ソーシャルフットボールも同じ意味で、いろいろなところでご苦労されてると思いますけど、フットサルコートで仲間と繋がって元気になるというのは、ある意味似てるなと思ってるところです。

二つ目は、総合型地域スポーツクラブを昨年立ち上げました。国立市に限らず、多くの市民同士で元気になる場を作っていこうという目標がありました。赤ちゃんから高齢者まで、社会的課題も含め、どんなニーズがあるんだろう、どんな場所を作っていくとみんないいんだろうと思っている中で、今のこのソーシャルフットボールという言葉を私も初めてお聞きし、そういうのがあれば、私の総合型地域スポーツクラブの中でも取り上げたいなど。私自身フットサルのコーチもずっとやってきているので、身近にそういう方がいらっしゃれば、そういう場所を作っていけるといいのかなと思いました。精神障がいについて知っている人が全然いないのでわからないんですけど、そういうニーズもあるのかなというのをちょっと思いました。

あと、産業カウンセラーとしての勉強もしているので、そういった意味でも何かケアして、一緒に楽しみながらつろげる場所、安心して信頼できる場所が作れるといいのかなと思います。一時的にリハビリとしてこの場に参加して、良くなると卒業していかれる方も多いということなので、私のチームはもう15年やってますけど、10年以上の人もいっぱいいます。一時的な場所として通過される方が多いという中では、本当に継続して普及していくのは難しいんだろうなというのを思いました。何がどうできるのか、全然まとまっていませんが、いろいろな接点がありましたので、何かできることはないかなと、少し思いを巡らせていました。

中塚：素朴な質問なのですが、ソーシャルフットボールに関わる人たちが、ソーシャルフットボールに関わる人たち同士で広がっていきたいというニーズはわかりました。けど、例えば健常者と一緒にやるとなってくると、しんどくなるんじゃないかなと思うんです。気を使ってしまって、自分の居場所ではなくなっていくみたいなことになるのではないだろうか。

それともう一つ。先ほど野村さんが地域と繋がりが無いとおっしゃっていました。やっぱり自転車で行ける範囲の「地域」にクラブがあれば、そこは誰もが集まってきて、いろんな人が交わる場となっていくと思うんですけど、例えばソーシャルフットボールの人たちが、自分たち以外の人たちと接するのはしんどいって居場所じゃなくなっちゃうとも思うとするなら、地域には根差さなくていいんじゃないかと。むしろ同じような境遇の方が集まって来れる場が、距離的には少し遠いかもしれないけど、自転車ではしんどいかもしれんけど、ちょっと電車に乗って2駅ぐらいのところに似た者同士で集まって好きなフットボール、フットサルが楽しめるようなのが、目指す姿としてあるんじゃないかなと、漠然と思いました。野村さん、あるいは泉さん、プレーされている立場でどうですか。

泉：僕のチームは主に春日部のフットサル場で活動してるんですけど、特に地域と繋がろうという考えは全くなくて、来れる人が来て楽しい、みんなで楽しむ場を持続可能な感じで続けていけたらいいんじゃないかと自分は思っています。続けるのが大切かなっていうのが、自分の考えです。

中塚：やはり、同じように精神障がいを持っている人たちと安心して、好きなスポーツを楽しめる場があればいいっていう、そういうところですね。

泉：でも僕たちのチームは、一般の方が来ることにも別に拒んではないんです。精神障がいじゃない方でも、一緒にやりたいって人がいればどうぞってところです。精神障がいのない人も、たまに一緒にやりますね。

中塚：なるほど

佐藤：私からもいいですか。

中塚：はい。お願いします。

佐藤：病気を抱えている人たちがチームを作っている場合に、例えばうつの方が代表していたりすると、なかなか外まで目が向かない状況なんですね。チーム運営だけでも、お互いがお互いを支え合ってフォローしあっていくのにいっぱいいっぱいなところもあって。そこにサポートする誰かがいてくださったらまた別だとは思いますが、病気を抱えたメンバーだけで運営をしていく難しさがあると思うんです。

中塚：なるほど。

佐藤：なので、地域の方と繋がるチームが、いま1チームだけはあるんですけども、そこはサポートして下さる立場の方がいらっしゃるって、地域とコミュニケーションを取ってという状況なので、またちょっとチーム運営が違っているのかなって思います。

中塚：いま言われたのが、埼玉の「ソシオ所沢」の事例ということですね。

佐藤：はい。精神疾患の人たちをサポートする立場の方がいて、その方たちが積極的に地域との繋がりを作ってくださっている状況です。私の息子が携わるチームは、本当にその精神疾患の人たちだけでやっているの、なかなかそこまでは目がいきません。先ほどお話しいただいた泉さんのチームは埼玉で一番強いチームですけど、やっぱり一番強いチームということで、健常者の方も練習と一緒に加わりたようなチームです。羨ましい限りです。そうなってくると、健常者も精神疾患も関係なく、ただボールを蹴るために集まっている。泉さんが所属しているチームはそういう形になっていると思います。チームによって状態、状況が違ってきて、いろいろかなって感じですね。

中塚：なるほどね。少しずつ状況が見えてきました。

磯：いま障がいをお持ちの方と健常者と一緒にやっていくというお話がありました。私のチームも一時期ですけど、聴覚に障がいをお持ちの方がいらっしゃるって、その方はデフフットサル元日本代表という方だったのでとてつもなく上手だったんです。私達健常者のチームに聴覚障がいをお持ちの方が初めていらっしゃる時に、僕もチームのみんなに、こういう方が体験参加したいんだけどどうかなとお話したら、「全然いいんじゃない」っていう感じでした。受け入れる方もよく知らないの、ちょっと調べたりして、こういう方だからこういうサポートしていけばいいのかなって。ご本人がいらしたときに「コミュニケーションをどういうふうにとっていけばいい？」みたいなこともお互いに素直に聞いたりして。障がいをお持ちの方も、もしかしたら一緒にやっていいんじゃないっていう方が結構多かったの。

ただ例えばね、精神障がいをお持ちの方で、コミュニケーションがちょっと苦手という方が多くいらっしゃるの、何となく想像できるので、ちょっとつらい状態になったときに、何の知識もない人が上手にサポートできるかという、やっぱりそれなりにわかっている方じゃないと難しいと思います。地域で受け入れる土壌はあっても、サポートできる知識はやっぱり必要なので、そういうのがお互いに近寄っていけるといいかなと思いました。

中塚：おっしゃる通りですね。例えばフットサルで同じルールのできるのであればやれば良いと思います。ただ先ほどの「てんかん」の話じゃないですけど、やっぱり病気を持っておられる方であり、何かあるかわからん。だけどそれは原因があって理由があって、対策もあるわけだから、それを知った上で一緒に遊べばいいんじゃないのということがオープンにできればいいんでしょうね。

これも先ほど磯さんが言われたけど、元々人と接するのがあまり得意じゃないという傾向をお持ちの方がチームにいらっしゃるとするなら、健常者をどんどん受け入れて、その人たちに指揮られていくようなことになると、リハビリとしてソーシャルフットボールをやろうと思ってる人たちにとっては、しんどくなるような気がするんですね。

野村さんどうですか、今の問いについては。

野村：日本ソーシャルフットボール協会のホームページには、「ソーシャルフットボールを通じてつながり、自分らしく生きていくことを尊重しあう社会を実現する」というメッセージが記されています。ソーシャルフットボールを通じてつながっていくことが大事にしていきたいことですね。

でも、思うんですけど、僕は選手としてはすごく下手な選手なんです。埼玉県内の人たちとは交流があって、優しい方たちがいるのですが、千葉県のチームの選手と交流したりとかできているんですけど、うまくない選手だと交流は厳しいんじゃないかなと感じています。僕はソーシャルフットボールの運営に入ってるので、関東大会の運営とかに参加したりできてるから神奈川県の人とも知り合いになれているし、千葉のチームとも他県のチームとも面識を持って、ご挨拶できたりできるんですけど、交流を持ってない人は交流持てないかなというところはありますね。どうやってつながりを広げていけるのかというところを、僕は感じました。

中塚：いま野村さん言われたことはすごく大事だなと思います。たけママさんがおっしゃったことと通じるような気がしました。プレーヤーとしては一緒にはやりにくい。技能レベルの問題か、メンタルの問題かはともかくね。だけどサポートする、支えるということで関わりながら、その場を自分の居場所にしていくというのはありだろうなと思うんです。支えるのもスポーツなんだという感覚ですよね。ありがとうございます。

嶋崎さん、小池さんからも、感想でも構わないんですけどコメントを頂けたらと思います。

嶋崎：そうですね。やっぱりフットサルというツールを使ってつながるのはいいんじゃないかなと思います。無理に広げていく必要はないと思うんですけども、きっかけにはなると思うので。やっぱりスポーツの一つの価値だし魅力だと思うので。そういうところでいろんな人とつながっていけると世界が広がっていくのかなと思います。さきほど磯さんがおっしゃったように、やっぱりある程度の障がいに対する意識、知識がないと、誰でもっていうわけにはいかないのかなとも思います。そういう方も含んで繋がっていくということになるんじゃないでしょうか。そんなことを、皆さんの話を伺って感じました。でもやっぱり確実に、フットサルによって世界は広がっていくんじゃないかなというところは感じています。

中塚：小池さんどうですか。

小池：貴重なお話ありがとうございます。以前、GP サッカー脳性麻痺のサッカーの埼玉のチームの村松健一さんという方がいらっしゃって、サロン 2000 にも、NPO 法人化する前に 2~3 年参加され、月例会にもおいでいただいた方いらっしゃいました。その方が、同じ埼玉ということもあって、大会に 2 回ぐらいお手伝いで行ったことありました。そのときに村松さんからいろいろと教えてもらったんで

すが、まさにいまの話で、脳性まひを持ってらっしゃるような方は、プレーは普通にやるんですけども、人との付き合いがあまり得意じゃないから自分自身を表現するとかコミュニケーションを取るのに苦労されてらっしゃる。そういう人間関係を作るところでなかなか難しいところがありますねという話をされてらっしゃいました。

その大会で面白かったのは、アンプティサッカーのチームを呼んできて交流試合みたいなのを、CPとアンプティの間でやって、そこに一般の人も参加して、私も一緒にボールを蹴った経験があるんです。それは非常に貴重な経験で、サッカーなかりせば、そういう方と接点さえないですよ。そういう意味では、サッカーがみんなをつなげていく。非常に緩やかなつながりだとしても、そういう人たちがいらっしゃるんだってということは体験できました。僕はすごくいい場所にご招待いただけた、声をかけてもらってよかったなって思ってるんです。

例えば、NPO サロン 2002 ではU-18 フットサル大会を年に一度、千曲市でやってるんですけども、その中の一コマで、こういう人たちがプレーする機会を設けるとかね、ただ単にそれだけでも、こういう人たちもいるんだってという気づきにつながっていくのかなど。実現しようとするならいろいろ越えなくちゃいけないハードルはあるんでしょうけれども。そんなことを感じました。

あと、いまの話と少しつながりますが、さいたま市のサッカースポーツ少年団の指導者は、年に一度、障がい者サッカーの大きな大会のサポートに関わります。どこのカテゴリーなのか、よくわかりませんが、障がい者のサッカーをやる高校生とか中学生ぐらいの人たちの大会で、埼玉に50~60チーム集まってやっています。そこに登録チームから指導者1人を必ず出すことになっていて、審判のお手伝いするんです。参加して思ったのは、健常者が、もちろんサッカーを楽しむんだけど、障がいを持った人たちが思いっきりプレーする機会は健常者以上に限られているので、すごく楽しみにして参加しました、あるいはやってて楽しくて仕方ないんです、みたいな人たちがほとんどだったので、こういう世界もあるのか、というような体験をさせてもらいました。僕自身もいい経験になったあと、そのことを思い出しながら、お話を伺ってました。

中塚：野村さんの弟さんも入っていられています。せっかくなので、お兄ちゃんの話聞いた感想などをいただけないでしょうか。

野村昌明：今日は皆さんのいろいろなお話を聞いて大変勉強になりました。兄がやっているということはずっと知ってはいましたが、それ以外の部分が聞けたことがすごく良かったと思います。あとは、精神障がいの理解が、ソーシャルフットボールを通じてでもそうですし、理解が広がっていけばいいなと思います。地域でとか、無理にやらなくてもいいと思うんですけど、ソーシャルフットボールを通じた形で理解が広がり、障がい者の共生みたいなところもそうだと思いますけど、そういうのに繋がっていったらいいのかなと思います。ありがとうございました。

中塚：昌明さんはソーシャルフットボールはなさらないんですか。

野村(昌)：私は元々サッカーをやった経験もなかったんで、一緒にやる機会は難しいですけど…。

中塚：お兄ちゃんも元々やってたわけじゃないんですか？

野村(昌)：そうですね。兄は結構頑張ってる、フットサルスクールや個サルに行ったりして結構頑張ってる練習してましたね。

中塚：忠明さんにそのあたりについてお聞きします。最初はリハビリで始めたソーシャルフットボールで、はじめたころはボールが思い通りに操れなくてという話もありました。そんな頃に、個サルに参加されてたということですか？

野村(忠)：精神科デイケアで、ボールを止めることとパスができるぐらいになった感じで、お仕事を始めてお給料をもらえるようになって、はじめて個サルに行けるようになったという感じですね。精神科デイケアでリハビリしてるときは、リハビリの方が大変なんで、本当に。お仕事を始めたりすると、外の世界に目が向くようになっていくじゃないですか。自分もお金が入るようになって、お金をどう使うかとか考えるようになりました。そんなころ、フットサルが好きになったんで、個サルに参加したりフットサルスクールに通ったりして練習していたという感じです。

中塚：今日は精神障がいの話でしたけど、精神障がいだけでなく何でもそうですけど、社会復帰するというか、フルタイムでなくても週何回、1日何時間だけでも「働ける」ということってものすごく大事だなということ、いまの話からも、そしてママさん(佐藤京子さん)話をお聞きしても思いました。

たけママさん、どうでしょう。リハビリはまず「回復」というところからはじまり、そこから「自立」まで。どこまでいけるのかはわかりませんが、そのプロセスで、学校を卒業すると次は、ささやかでも「働いて給料もらう」ようになることが、大きな自信になるだろうし、いろんな選択肢が広がっていくということ、いま改めて感じているところです。

佐藤：大事ですね。社会と繋がっていくことが大事だと思います。そこに行くまでのきっかけとして、外に出る。自宅にこもっていないで外に出るきっかけがソーシャルフットボールだったりします。障がい者サッカーのような楽しいことが、外に出る習慣を作るきっかけになってくれたらいいなというの我也思います。周りとのコミュニケーションも、フットサル、ただボールを受けるんじゃなくて、コミュニケーション取れないとチームワークってできないと思うので、そういうところでも学んでもらうこともできるし、会話が生まれたり、他者との繋がりもできて、少しずつそれが社会復帰への足がかりになればいいなと思います。

中塚：ありがとうございます。そろそろおしまいの時間が近づいてきています。野村さん、今後へ向けてのビジョンなどがありましたらお願いします。

野村：そうですね、いろいろ広がっていくといいなって。でも、外の人に入ってもらうのも、専門的な知識が必要だというお話もあって、いろいろ考えさせられたというか勉強になりました。何にもわからない状況でというのはなかなか難しいのかなと思います。少しずつ広げていく感じで進めていきたいと思いました。

中塚：まさにこの場が、少しずつ広げていく場ですね。本日参加された方が、私もそうですが、「ソーシャルフットボールはこういう世界だったのか」ということを知り、新鮮で勉強になりました。この続きで第2弾、第3弾ができるといいですね。

ほかに来万とされたい方はおられますか？

嶋崎：今日私が一番感じたのは、中塚さんも言われたように、こういう世界を知ることができたということが大きかったと思います。だからやっぱり、まずは何か「広げる」というより、まずは「知ってもらおう」ということが一番なのかなと思います。

例えば、ちょっとズれるかもしれないんですけど、パラリンピックで車いすラグビーのチームが金メダルを取って、結構多くの方が車いすラグビーを、今まで見たことがなかったような人たちも見たと思うんです。そういう人たちの感想って、「なんだ俺らよりすごいじゃん」「健常者より全然激しい事やってるじゃん」というような感想だと思うんですよね。

そういうことが普通に知られるようになると、いろんなことが動きやすくなるんじゃないかなと思います。だからまず知ってもらおうということが、活動の第一歩なのかなということを感じました。今日、いろんなことがわかりました。多くの人に知ってほしいなと思いました。

小池：今日、たけママさんと泉さんにおいでいただきありがとうございます。生の声をお伺いできたのは非常に嬉しかったです。いろいろご苦労が多いこともわかりましたが、まずは私達も「知る」ところから始めたいと思いました。

中塚：最後にちょっとおまけです。先ほど知的障がいのサッカーが「PRIDE in Blue」という映画になった話を紹介しましたが、同じ中村和彦監督による電動車椅子サッカーのドキュメンタリー映画「蹴る」というものもあります。何年前か前に、中野にあるの小さな映画館に見に行きましたが、そのときちょうど中村監督も来られていて、いろいろ話をする機会がありました。やっぱり映画って、ダイレクトにものごとを紹介できるのでわかりやすい。すごくいいなと思いました。

ソーシャルフットボールでも、いずれは映画制作を！

ちょうどサロン 2002 が主催する U18 フットサルリーグチャンピオンズカップが 2026 年 1 月の大会で 10 周年となります。これを機に、我々のメッセージを込めた映画を作ろうと動いています。長野市在住のフランス人映画監督を巻き込んでいます。文化面からもアプローチしたいと思っています。

野村さん、どうもありがとうございました。それから泉さん、たけママ(佐藤京子)さん、野村さんの弟さんはじめ、みなさんありがとうございました。新鮮でよい会になったと思います。

残れる方は、同じところで引き続きオンライン飲み会で話の続きをしましょう。別に飲まなくてもいいですよ。しばらくここを開けておきます。

5分後に乾杯です。

オンライン懇親会で話は続く…